

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

Table with 4 rows: 事業所番号 (0170501795), 法人名 (三愛商事株式会社), 事業所名 (グループホーム 里の家平岸 あじさい), 所在地 (札幌市豊平区平岸5条12丁目1番26号), 自己評価作成日 (令和2年5月1日), 評価結果市町村受理日 (令和2年8月6日)

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所では、愛のある暮らしの中で、楽しく生涯を送れることを願いとし信じあえる希望ある福祉を創造し、社会に貢献していくことをモットーにしています。具体的には、ご自宅での生活状況が、入居しても延長したもとなるように配慮しながらご自宅に近い環境となるよう努め、支援させて頂いています。馴染みのある家具や道具に囲まれながらの食事作り、畑仕事や地域の交流などで、生活のリズムを通して、忘れていた自分を取り戻し、穏やかに日常が過ごせるよう支援に努めております。また、職員一人ひとりが、利用者様と生活を共にしていることを常に意識し、ゆつくりと関わりをもち、落ち着いた環境の中でコミュニケーションを図っております。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

Table with 2 columns: 基本情報リンク先URL, http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/01/index.php?action kouhyou_detail 022 kari =true&JigyosyoCd=0170501795-00&ServiceCd=320&Type=search

【評価機関概要(評価機関記入)】

Table with 3 rows: 評価機関名 (特定非営利活動法人 福祉サービス評価機構Kネット), 所在地 (札幌市中央区南6条西11丁目1284番地4 高砂サニーハイツ401), 訪問調査日 (令和2年7月20日)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は最寄りの地下鉄やバス停から徒歩圏内にあり、住宅地に立地し、開設して18年目となる。職員の地道な努力により、地域の行事には積極的に利用者とお出かけ、町内会の一員として暮らしている。運営推進会議には、それぞれ多数の町内会関係者や家族、介護事業所と行政の参加を得て意見交換が行われ、得られた意見を運営の充実に生かしている。コロナ禍で面会の制限がある中で、職員の代筆もある手紙や電話、テレビ電話、ライン等で利用者、家族の安心に繋げている。切手を貼った封筒を持参する家族もいるなど、家族と共に利用者を支えている。外出も自粛しているが、敷地内には桜や松、芙蓉の樹木、ラベンダー、露草、小花類、町内会から寄贈のペチュニアのピンクの花が咲き乱れ、癒しの空間になっている。法人主催の食事コンテストでは優秀な成績を収め、職員は、さらなる食事作りに励むなど、常に前進しているグループホーム里の家平岸である。

Table with 4 columns: 項目, 取り組みの成果 ↓該当するものに○印, 項目, 取り組みの成果 ↓該当するものに○印. Rows 56-62 detailing service outcomes and staff performance.

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎日の朝、夜の申し送りでは理念を唱和し実践していた。理念の他に月の目標を定め取り組んでいた。コロナウイルスの影響により、申し送りなど密接するような場面は控えているが理念は実践している。	系列グループホームの共通理念を踏まえ、ユニットそれぞれに目標を設定し、実践に努めている。新人研修では理念の意義を説明し、職員の意識統一を図っている。利用者にとって何がベストなのかを念頭に於いた支援を行っている。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	管理者は地域の行事や会議に積極的に参加している。利用者も地域の行事に参加したり近隣の散歩などで地域交流が図られているが、現在はコロナウイルスの影響により自粛している。	避難所でもある寺院の行事に参加したり、神社祭では、駐車場が子供神輿の休憩所となり、お祓いを受け、その後に公園に用意された椅子で、子供相撲を見物するのが恒例となっている。中学生の職場体験や、ボランティアの受け入れは利用者にとって程よい刺激になっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議などでも、地域の人々に認知症の人についてや、その生活などを説明する場面が多い。又、地域の方から質問や入居相談を受けることも多く少しでも貢献できていると感じられる。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一度運営推進会議が行われ、報告に対して様々な意見が聞かれている。会議が終わった後も更に質問を受ける場合も多い。外部からの意見には思わぬ気付きも多く、ケアに生かされている。	会議は、それぞれ多数の町内会関係者、家族、地域の介護事業所と行政の参加の下、年6回開催している。取り組みや利用者の状況等を公表し、メンバーから意見や情報、時には職員への労いの言葉があるなど、事業所への理解が得られている。	活発な意見交換が行われているが、議事録には発言内容の記載が少ない状況にある。出席できなかった家族に、より具体的な内容の周知を検討しているので、その実行に期待する。
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	主に管理者が市町村担当者と連絡を取っている。特に生活保護課や保健福祉課等とは密に連絡を取り合い、家族への橋渡しをしたり制度に対するアドバイスを受けるなどの協力体制ができています。	行政とは本社職員と管理者が関係部署と関わりを持ち、運営の充実に生かしている。新型コロナウイルス感染予防や身体拘束適正化等の疑問点に適切なアドバイスを得るなど、良好な関係を構築している。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	禁止となる行為を職員は理解し日々のケアに取り組んでいる。内外の研修など継続して学ぶ機会が設けられており、その他にも管理者からのアドバイスを受たり、申し送りノートなども活用し随時身体拘束をしないケアへの見直しが行われている。	運営推進会議時に適正化委員会を開催している。11項目ある禁止の対象となる具体例を毎回1項目ずつ説明し、事業所の実情と照らし合わせ、理解に繋げている。職員は、研修会等の学びをケアに生かしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修の参加に限らず日々のケアでも職員同士で対応について適切か迷う場合にはそのままにせず注意し合ったり会議で話し合われたりしている。管理者からもアドバイスを受け、ケアに生かし虐待の芽を摘むよう努めている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去には制度を活用していた入居者がいたが、今年度はいなかった。いつでも制度が活用できるよう、内外の研修に参加し、学ぶ機会の継続に努めている。家族への説明は主に管理者から行われている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族からの疑問や質問があった時はその場の職員も説明し、説明の難しい場合は改めて管理者から説明する場を設け、利用者本人や家族が理解に繋がるよう努めている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時や電話連絡の際には職員は必ず近況報告を行うよう努めており、ケアに限らず、遠慮なく、自由な意見を言ってもらえる環境を整えている。	家族には、来訪時や「里の家だより」、電話、テレビ電話、ライン等で利用者の近況を知らせている。職員の支援で、利用者から葉書や手紙、年賀状を受け取る家族もいる。利用者や家族の意見には早急に解決策を講じている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	主に各職員との面談の際に、意見や要望など聞く場面が設けられている。また、日常の中でも意見があれば伝えやすい環境が整っており、内容によってはすぐに反映される場合もある。	ユニットリーダーは、職員から業務上の意見や提案を常に傾聴し、問いかけも行い、必要時は管理者に報告している。事案に対しては管理者会議にかけるなど、代表者に現状を伝え業務改善に努めている。希望休にも出来る限り応じている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者やリーダーが面談を行い、労働環境の話し合いを1年に何度か実施している。コロナウイルスの影響により、最近では特に職員の疲労を考慮し休憩や有給休暇に重点を置き労働環境の整備が図られている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修を月に一度受け、外部の研修にも参加していたが、コロナウイルスの影響により現在は自粛している。内外の研修の他に日々、管理者より入居者の病気の特性やケアのあり方などの申し送りがあり学ぶ機会となっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は市や区の介護施設管理者たちが集まる連絡会などに所属しネットワーク作りに協力している。近隣の事業所で行うカフェなど参加する機会もあるが、現在はコロナウイルスの影響により自粛している。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時に管理者は本人や家族、あるいは担当のケアマネから、本人の不安や心配を含めた要望・希望を聞き取っており、知り得た情報は職員に周知し、特に移り住んだ初期の対応に配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時に主に管理者が家族の困りごとを聞き取っている。又、職員も関係作りを進めながら、心配事は無いか面会や電話連絡の都度聞き取るよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	困りごとはどの方にも幾つかあるが、その中でも優先順位を見極め対応している。又、状況により、必要とする優先順位は柔軟に変更し対応している。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	例えば若年職員や男性職員に対し、関りの中で利用者から「助けてあげる」「手伝うよ」といった言動があり、一緒に生活している者といった認識や関係性が感じられる場面がある。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員だけでは解決できない場面では家族に電話連絡をし協力を仰ぐことがある。家族も熱心に本人と話し、その方の気持ちが穏やかになったり、安心した表情が見られ、苦しい気持ちから解放されることがある。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前住んでいた近所の方がお土産を持って面会に来てくれたり、昔よく行っていた馴染みの店に買い物に出掛けるなど取り組んでいた。現在は、コロナウイルスの影響により活動を自粛している。	家族の同意を得た利用者の友人、知人の面会を受け入れている。誕生日に要望の美容室に同行したり、馴染みのスーパーに行きたい、ラーメンを食べたい等の要求にも応じている。外泊、外食など、家族の支援もある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員がさりげなく間に入ることによって、利用者同士が自然と助け合ったり、労わるような言葉を掛けている場面が多く見られる。職員はその時間や様子を大切に、過度な介入はしないよう気を付けている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、相談の窓口を広げていることによって、友人家族や、他の親族の入居相談があったり、家族が職員として勤務を続けている場合もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自身で意向を伝えることができる方の希望は職員で共有し実現できるよう取り組んでいる。困難な方は家族と相談したりし、選択する工夫を行うなど可能な限り本人の思いに添えるよう努めている。	職員はコミュニケーション能力を高め、利用者のその日やこれから先の要望を傾聴している。思いの表出がスムーズでないときは、道徳的観念を基準に判断することとしている。歩けるようになりたい、トイレを利用したい等の意向は、ケアプランに反映している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に管理者が家族や本人から聞き取りを行い、職員に周知されている。入居してからも会話の中から今までの暮らし方などを本人が話してくれることが多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その日の中でも心身の状態は変化することが多いため、その時々状況や情報を職員間で口頭で確認し合い、把握するよう努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃の生活の様子や会話から意見や希望を汲み取っており、家族に対しても面会時や電話連絡の際に意向を聞き取っている。ユニット内職員に限らず看護師や医師、薬剤師などの意見も参考にして介護計画を作成している。	ケアプランは、状態変化が見られないときは3ヶ月毎に更新している。利用者や家族の思い、医療関係者の意見を踏まえ、職員の意見や提案を集約して作成している。介護記録は支援目標の実践が記され、さらに支援目標の1項目を1日の重点ケア目標としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	その方の発した言葉なども残し、気持ちや本人の様子が分かるような記録を心掛けている。又、職員間の申し送りノートも活用し入居者の情報共有や、プランの見直しに役立っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	主に管理者が他事業所、地域包括支援センターなどと連携し、相談や情報交換しながら入居者の希望が叶うよう取り組んでいる。年々、職員にも柔軟な意識が芽生えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事に参加したり、ボランティアを積極的に受け入れ楽しめる時間を作ることが出来ていたが、今現在はコロナウイルスの影響により自粛している。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	例えば眼科、循環器科、泌尿器科など訪問診療以外での受診が必要となった場合には、以前受診していた・馴染みの病院へ受診することを第一選択肢として、本人や家族に意向を確認している。	殆どの利用者は、月2回の往診医を主治医としている。入居前からのかかりつけ医や専門医の受診支援は基本的に家族とし、それぞれの受診結果は共有している。医療関係者と相談の上、服薬の量が減った利用者もいる。	

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	情報や気づきを報告だけでなく、困っていることなどを気軽に相談しアドバイスを受けている。訪問看護の連絡ファイルがあり、全職員が内容を確認し把握できるようになっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が安心してできるように、皆で手紙を書いたり、数名でお見舞いに行っている。管理者は家族や病院関係者と情報交換し連絡をこまめに取り合い、早期退院できるよう努めている。退院できた日には赤飯を炊き、喜びを分かち合っている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に管理者から説明があるが、本人の状況に応じて随時説明の場が設けられている。利用者に対しては職員が日頃の会話から希望を汲み取ったり、他者の最期に立ち会う場面などで意向を確認している。	入居時に状態悪化時の対応を指針で説明し、同意を得ている。利用者の「最期までここに居たい」の要望に応え、家族、医療従事者、職員の方向性が定まった時点で、厳かなターミナルケアを開始している。職員は、それぞれの過程から学びを得ている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを各自が定期的に確認している。過去の事例などから教訓とし、学びの機会として自分たちのケアに活かすなど、実践する力が少しずつ各職員はついてきている。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	北海道胆振東部地震を体験後、季節を考えた暖房器具や食料品などの備蓄を行い、火災に限らず災害も想定して訓練を実施している。備蓄品の定期点検や町内会の避難訓練参加なども行っている。	年5～6回自主訓練を含め、防災業者や地域住民の協力を得て、日中・夜間想定火災避難訓練や水害など自然災害の避難訓練を行っている。町内会館を含む避難所の確認、緊急通報装置に町内会長の登録、発電機の操作や備蓄品の確認等を行い、非常時に備えている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個々の利用者が受け入れやすい言葉かけの内容を職員間で共有し、特に入浴や排泄時などには尊厳が守られるよう言葉の内容に配慮している。	言葉遣いに気をつけたり、トイレのドアはきちんと閉める、同性介助の受け入れ、職員間の連絡等はインシナルを使うなど、適切なケアに努めている。呼称は利用者や家族の意向を取り入れることもある。個人情報の取り扱いも十分配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は日頃から利用者本位を意識して関わっており、どの入居者も平等に意向が尊重され、反映されるような取り組みに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	時間は要するが個々のペースに合わせて支援できるよう努めている。職員主体ではなく利用者が自分で決めたり選択することが出来るよう工夫して取り組んでいる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族と連絡を取り合い、家族に替わり職員が衣類を購入したり、実際に本人と外出し、サイズや色など好みの物を自由に選んでもらうこともある。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は食べるだけではなく献立の決定や好みの把握、片付けなど一連の取り組みに対し個々の力を発揮できるよう努めてきた。今現在はコロナウイルスの影響により活動を自粛している。	献立は、利用者の要望や彩り、旬の物を取り入れ、ユニット毎に作成している。急な要求にも応えられるよう準備している。日常食の他に寿司の外出、ラーメンを食べに外出、誕生会やひな祭り等の行事食を利用者と味わっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	その日の個々の状況に合わせて量や形状を変え提供しており、状況によっては経腸栄養剤を経口摂取したり、栄養補助食品を提供している。むせの強い方に対してはゼリーを作り水分量を確保している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に行っており、見守りの後、仕上げを手伝ったり介助している。訪問歯科のアドバイスも参考にし、歯間ブラシやスポンジ、ペーパーなども使用しながら、清潔保持に努めている。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を使い、職員が決めた時間ではなく、個々の排泄間隔やサインに合わせ、羞恥心に配慮した声かけや誘導を実施している。個々に合ったパットを使い、汚れる前に、トイレで気持ちよく排泄できるよう取り組んでいる。	利用者の排泄間隔、習慣を把握し、排泄チェック表を参考に自力排泄の方にはそっと見守り、尿意の無い方には声をかけトイレへ誘導している。布下着以外は、利用者や家族に説明して適宜衛生用品を使用し、不快感の軽減に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日頃から提供する食事や飲み物も自然排便に繋がっているという意識で提供している。便秘予防の為適度な運動も生活に取り入れており、日中トイレで気持ちよく排泄できるよう薬調整している。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	時間や曜日は可能な限り個々の希望に合わせて対応している。入浴が苦手な方に対しても無理強いすることもないようにしており、出来るだけ楽しい時間となるよう1対1での会話や、好みの入浴剤を選ぶなど支援している。	毎日入浴できる態勢にあるが、週2回を基本に同性介助に配慮して支援している。自力入浴を見守り、状況によってシャワー浴や2人介助を行い、入浴後は軟膏を塗布している。入浴中は歌ったり本音を漏らすこともあり、ケアプランに反映することもある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	概ね個々の生活リズムがあるものの、その日の体調や様子に合わせて、休息を促したり、食事を遅らせるなど柔軟に対応し、各自のペースを尊重するよう努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	特に薬が変更になった時には注意深く観察し、その方の様子について把握に努めている。変化があった場合には主治医や薬剤師に報告、相談し助言を受けたり薬の変更が行われている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の生活歴の把握に努めており、ビールを飲む方やお喋りする犬のおもちゃを可愛がる方、折り紙を熱心に折る方などそれぞれが楽しみをもって生活できるよう支援している。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	アンケートや生活歴、家族からのアセスメントなど踏まえ外出先を決めて出かけている。天気の良い日は洗濯物を干しに出たり、おやつを外で食べたりと毎日のように気軽に駐車場に出る機会を持っていたが、今現在はコロナウイルスの影響により活動を自粛している。	ユニット毎にアンケートや聞き取りで、外出の要望を把握している。喫茶店、外食、イチヨウ並木やラベンダー観賞、中山峠で名物の揚げ芋を食すなど外出を楽しんでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的にはホームで金銭管理を行っているが、外出の際には本人に支払いを任せたり、金額を見ながら買い物する場面があり、日頃から職員と一緒にユニットのお金を計算する機会がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員が家族に電話連絡する際には、本人に替わり家族と話す機会を設けたり、本人がハガキで近況報告を書くといった場面づくりを行っている。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	例えば、利用者同士でも「寒くないかい?」とひざ掛けや上着を貸しあったり、「まぶしいよね」とカーテンを閉めたりと、利用者同士で居心地の良い空間づくりに努め、助け合っている場面が多く見られる。又、季節に合わせた掲示物を皆で作し、空間作りを楽しみながら行っている。	約30畳ある居間には、行事の写真や利用者の共同作品のちぎり絵等を掲示している。七夕の短冊飾りなど、季節に因んだ飾り物をレクで制作している。自然と居間に集まり、脳トレやペンで手紙を書いたり、テレビを観たりと寛いでいる。職員は、利用者が過ごしやすい生活空間を作り上げている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	話し込んでいる場面ではお茶を提供し二人でゆっくりと会話が楽しめるよう空間作りをしている。集団から離れて歩いている方にはさりげなく付き添い、その方が安心できる場所と一緒に探すようにしている。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自分で作成した作品や、家族に依頼して持参してもらった思い出の写真、手紙などを掲示し、入居時から徐々に自分らしい部屋作りになるよう本人と職員と一緒に関わっている。本人の状態に合わせて随時居心地の良さを本人と見直している。	居室作りは、ユニット毎に利用者と相談したり、家族が利用者と一緒に調度品などの配置をしている。家族の写真を飾ったり、雑巾縫いをするなど、自分の居場所として生活している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	心身の状況が悪化したとしても安心して生活できるように、不安や失敗が目立たなくなるような環境づくりに留意している。また、少しの工夫で出来ることが増えるよう取り組んでいる。		